



山のわかれ山の出会い
田中澄江

講談社版



山のわかれ山の出会い



昭和34年12月30日 第1刷発行

著 者 田 中 澄 江
 ^た ^{なか} ^{すみ} ^え

¥ 290 発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 豊国印刷株式会社

発行所 東京都文京区 株式 講 談 社
 音羽町 3-19 会社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (藤沢製本)

© S. Tanaka 1959. PRINTED IN JAPAN

目 次

山がそこにゆけば

山のあなたに

山へくる条件

77

27

7

幸運な山不運な山

118

わたくしは山になりたい

157

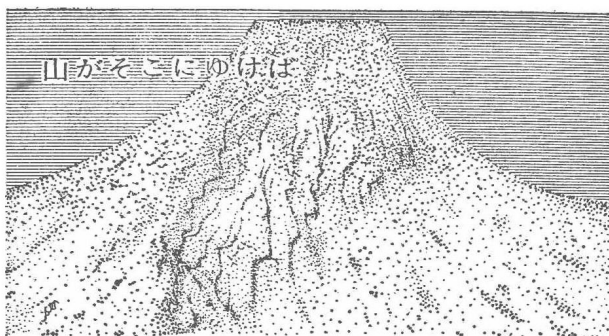
岩ばかりの山

184

装幀・真鍋 博
写真・三木 慶介

山のわかれ山の出会い

山がそこにゆけば



山が、そこにゆけばわたくしをまもり、いとおしんでくれるものとして生きはじめたのは、もうずっと昔、父が死んで間もない、少女の頃だ。

家のまわりに、東京は武蔵野の、林や野や畑を、たくさんに残し、晴れた日は夕焼けが、奥多摩から秩父の、山なみの上に燃えた。眼に見える限り、林も野も畑も、赤ひといろに、もやいかがよい沈むとき、山は黒々と紫をふくんで、きっぱりと形あざやかに、動かない静けさを保っていた。

そのころ小川未明さんの、「牛女」という話を、なつかしく読んだ。

牛女は物言えぬおしである。牛女は子供をつれて、村々を物乞いしてあるく。牛女は病んで疲れて死に、

その生きた日の姿を、山に残す。

山に牛女のかげのあらわれたとき、ひとびとは、ああ、牛女が子供を見ているよと話しい、残された子によせる心を、あわれむのであった。

空と地を限る山なみに、わたくしは自分の牛女をさがした。中に一番高く、いのちあって、ひとを招くようにしてそびえたっているのが富士。

あれが日本一の富士山と、はじめて教えたのは、生きていた父である。

町外れの、田川のほとりの石橋の上で、そのとき、四十歳前の若い父は、首にやわらかいグレイの絹を巻き、グレイのセルのお対を着て、しゃがんでわたくしと、同じほどの丈の高さとなり、その指に示された山は、遠く紺青の山なみの上に、白い形して、勾やかであった。

町には富士講と言い、富士の山に、神が住むと信じる仲間があつて、男の一生に一度は、白木綿の衣裳して、六根清浄を唱え、富士のいただきまで辿りつかなければならぬとされていた。何回もゆき、八十歳でなお、志をとげた人もあり、女はのぞかれ

た。女には男ほどに、山に住む神から、そのいのちの灯のはげましを与えられてくる必要は、ないとされたものか。

家は江戸を関東から信濃に、木曾につなぐ中仙道の一番はじめの宿場町にあり、武士の世が亡びて、街道の旅人相手に発達したこの町のあり方がかわった時、父は旅館だった屋敷内に工場を建て、羽織紐の製造をはじめた。馴れぬ商売は、土地を金にかえた資本ばかりを呑みこんで、跡とりとしての父に、不安と焦慮の日々が積み重なったにちがいない。三十五歳で父は富士山にゆき、帰って病みついて、四十一歳で死んだ。

写真に残る面かげは、骨格ゆたかな長身で、肩を張り、こう然と首をあげ、病いも知らぬ壮年の姿なのだが、すでにわたくしの知る頃は、家の仕事を雇い人任せに、伊豆や鎌倉に転地していたりして、親しく一緒に並んだ記憶は、ただ一度の機会きりない。その日、富士を見た。

家じゅうで、父は一番えらいひとであったから、わたくしにはそのとき、山の名を教えてくれた父のやさしさがうれしく、晴れがましく、何かおそれ多いような気もち

でかしこまり、はじらってさえた。

声もかすれて言葉もろくに浮ばないでいたようだ。

大事なひとを失ったと、とりかえしもつかない思いに、もっとしゃべり、もっと聞き、もっとそばについていればよかったと悔いられたのは、父の死後である。七歳であつた。

父は五年の闘病の果て、胸の中を細菌に食いあらされ、手足もなえて、おがらのように、枯れ芦のように息絶えた。戒名などつくるな。葬式も派手々々しくするなと遺言に伝えて。できれば火葬にしてほしくないとも。

父の生身は、病菌に敗れたが、父の意志は、死ぬ事を拒み、あの古代エジプトの王者たちのように、生ける日の原型を、たとえ地に埋められようとなお、地表の一面にとどめておきたかったのであろう。死者の願いはとどかず、遺体は焼かれて、金の火箸でたたくほどもなくて、骨はくだけ、灰の方が多かったのだと言う。

骨はまだしも思い浮べることが出来る。父の灰とはどんないろで、どんなはかなさ

に散りとぶものか。臨終のその間ぎわに、長男をのぞいて、ほかの子供たちには、死に吸いこまれてゆく姿を見せるなど、その席から遠ざけた父であったから、わたくしは、その死の実態を知らない。それは一つの消滅。いや、旅立ったひとの、一つの不在にすぎない。旅人のいつて帰らぬ姿は、旅館を業として、わたくしの先祖たちが、常住に見聞きした、人の世の常であつたろう。ただ一つ、生は再会のものぞみに息づき、死は永遠にこれをさまたげる。生と死の、とてつもなく大きい距離を、何を尺度にして測れよう。

大声で泣けばとて、とどめようもない未知の底におちこんでいった父は、また、はじめてわたくしに、人間を無力な者、弱い者として教えてくれた。そしてまた人間のいのちの行方に、変身という術のあることも。

その夜、父はまさしく生きてあらわれた。白布に被われた棺を前に、通夜の読経するひとびとの間を、一匹の白い蛾がとびかい、口々にみな、父の魂が来たのだと、みまもったのである。蛾は長男の兄の背に止まって、やっぱりとが心配なのだ、ま

だ若い三十歳の母を泣かした。

その白い蛾が、はつきりとわたくしに示したのは、父というひとの、生からの、脱落であった。もはや人間の、父の姿には、二度とあうことはできぬ。父と言葉をかわすことはできぬ。だがその夜から、父は、人間でないものの形に生きて、わたくしのかたわらにあると、思い初めた。あるときそれは、風のかすかな流れの中に、あるとき夜空の、一きわ強い星の光りに、わたくしは父の生きているしをもとめたが、山もその一つだったのである。

父と並んで見た遠い山なみ。奥多摩も秩父もそこに連なり、とりわけては富士の山、富士でなくてもいい。山でさえあれば。高くさえあればよかった。

山は父そのものでないかもしれぬ。しかし、山に吸いとられた父のいのちは、そこにたしかに生き残っている筈であった。

はじめて登った、山らしい山は、小学校六年の秋の遠足にいった、高尾山である。

黒板に書かれたその文字を、どんなにかがやいて見つめたことだったろう。高尾山

は、武蔵野と秩父山地を区切る、丘陵地帯の外れにある。秩父から丹沢、箱根にかけての山なみこそ、幼ない日の自分が、父と並んで見た山々とはいつか知っていて、その一画に足をふみいれることは、生きた父にめぐりあえるような、胸そよぎなのであった。「孝女白菊」とか、「石童丸」とか、子供が父を求めるお伽ばなしの、自分もその主人公の一人になった思いで、当時、まだ、バスもケーブルもない高尾山への道を、いそいそと歩み、両側の丘々にすすきの穂の白く光るのを、まことに、自分をさし招いてくれているのだと見た。谷が迫り、道がけわしく、樹々のうっそうと茂りあらうとき、この息あえぐ苦しさの向うに、とても幸福な、とても晴れて明るい国が、自分を待っているのだと思った。

メエテルリンクの、「青い鳥」の上演が、その前の年に有楽座であり、青い鳥をさがす兄妹が、死んだひとのそのまま生きている、思いでの国にゆく。生きた少年少女たちが、死んだおじいさんおばあさんと手を取りあって、同じ言葉、同じ場所によるこびあうさまの、何と幸福にかがやいてたのしい風情だったことか。自分の大事な人

たちのかたわらに、その生が永遠に足を止めるなら。

そのころ、父のあとに残された母と子は、父の残した負債償却まで、父と住んだ、大きな家をひとに貸し、借家住いでいた。おさないわたくしには、家の暮しがともしくなつてから、急に世間のひとびとが、いじ悪く、冷くなつたように見え、友だちと遊ぶより、墓場や、野の道を歩くことを好んだ。

墓場には死者の息づかいがあり、野の道からは山が見える。共にあの世の父との出あいの場であり、死者の列から、父をよびもどしたい願いこそ、わたくしに、神の名を教えたものかも知れないと思う。

高尾山のとっぺんまで、その日、ただ、ひたすら、上へ上へとあこがれて辿りついた時、見たのは、大きな富士山だった。紫だった谷々の上に、何ともいえないなごやかさで、富士は白く雪に粧い、生きものの心ある微笑を浮べて、お父さんと、声にならぬ叫びをあげて立ちすくみ、わたくしのわらいは止め度なかった。

高尾山ゆきから十年して、学校の修学旅行に十国峠の尾根道があるいた時、富士は